

奈良時代に 中国から渡ってきた柿

「食用・用材として広く利用されていた」

「渋柿の栽培は奈良時代には始まっていた」

私たちが食べている柿は、日本をはじめ中国や朝鮮半島で古くから栽培されてきました。植物学上のカキノキ属に属する柿の仲間は、アフリカ以外の熱帯から温帯にかけて広く分布し、およそ二百種にのぼります。

日本にはヤマガキなどが自生していたという説もありますが、市田柿に用いられている渋柿は、奈良時代に中国から伝わったと考えられています。ちなみに、生食用の甘柿は、奈良時代以降鎌倉時代にかけて日本で改良されたものだといわれています。

柿は食用としてだけでなく、緻密な木質が好まれて、高級用材としても利用されてきました。古くは東大寺の正倉院にも、カキノキ科の木材を使った厨子「黒柿両面厨

子」や献物箱「黒柿蘇芳染金銀山水絵箱」といった数々の宝物が納められています。

史料に残る柿の記述

最初に「柿」が文献に登場するのは「古事記」や「万葉集」のなかの地名や人名としてです。歌聖とも呼ばれた歌人柿本人麻呂の名前は「自宅の門のそばに柿の木があった」のが由来とされています。

その後、史料や文献に柿が登場してくるのは平安時代以降です。平安時代中期に編纂された律令の施行細則「延喜式」には、「柿百株」を栽培したという内容や、「干柿子二連」「熟柿子四顆」などが神殿に供えられたという記述があり、すでに渋柿が栽培・加工され、食べられていたことがわか

「飯田・下伊那地域は(古)東山道の要所」

奈良時代から平安時代の頃、全国が五畿七道という行政区に分けられ、七つの官道が整備されました。中国から伝来した栽培用の渋柿は、大陸との窓口でもあった九州地方から西海道、山陽道などを通して都へ伝わったと考えられます。さらに、それぞれの官道は都と地方をつなぐ幹線道だったので、行き交う人や馬によって、柿も日本各地へ広まったと想像されています。

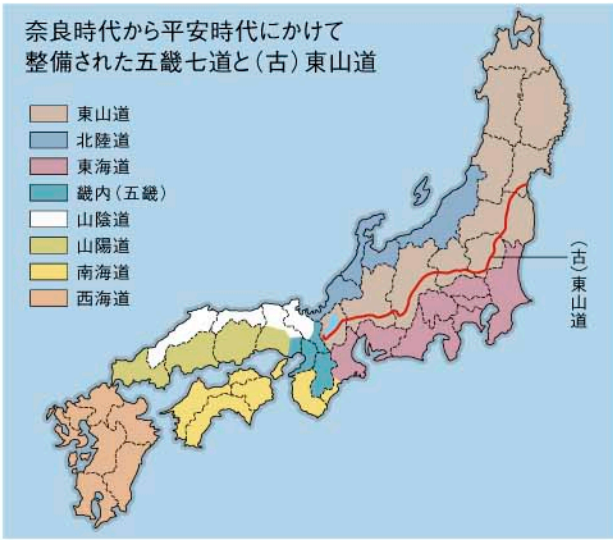
飯田・下伊那地域は、奈良の都を起点に今の岐阜県、長野県、群馬県など本州内陸部を

通って東北へと通じる(古)東山道の道筋にあたりました。そのことから、この地域でも早くから柿の栽培が行われたと推測されています。

『下伊那史』には、鎌倉時代弘安元年(二七八)に日蓮宗の開祖日蓮聖人から伊賀良庄(現在の飯田市)の地頭代(と推定される)四条金吾頼基へ送られた礼状が紹介されています。これは「日蓮聖人御遺文」という史料に収められているものです。手紙には「申柿五把」と書かれてあり、鎌倉時代に飯田・下伊那地域で渋柿の栽培・加工がすでに行われていたことがわかる貴重な史料となっています。

柿の種類

甘柿	完全甘柿 ……果実が大きくなるうちに水溶性タンニンが不溶性タンニンへと変化し、渋味がなくなる。幼果や未熟果の場合、渋みが残っている。富有柿や次郎柿など。
	不完全甘柿 ……種子が形成されると、渋を抜く物質が果肉に広がり渋が抜ける。種子の数によって渋の抜け方が異なる。西村早生柿や禅寺丸柿など。
渋柿	完全渋柿 ……種子の形成と脱渋に関連がない。渋が抜けていない状態で収穫し、アルコールや天日によって渋抜きをする。市田柿、西条柿など。
	不完全渋柿 ……種子の形成によって渋を抜く物質が作られるものの、その量が少ないか、あるいは種子ができにくいため渋が残ってしまう。平核無など。



正倉院の宝物「黒柿両面厨子」。観音開きの扉には黒柿の木目が模様のように用いられている

ついでです。また、三古典説和集の一つ「宇治拾遺物語」には「柿の木に佛現ずる事」という、京の都の五条天神付近にあった柿の木を題材にした説話が残されています。同じく説話集の『古今著聞集』の巻十二「偷盗の話」にも渋柿が登場しています。昔話にも「さるかに合戦」や「柿の大入道」など、柿の木が出てくるおなじみの話がいくつもありません。

柿は神の果物

柿の学名は、Diospyros kaki Thunberg (ディオスピ羅斯 カキ ツンベルク) といいます。Diospyrosとは、ギリシア語の「Dios(ゼウスの神、最高神)」と「pyros(小麦や果物)」から生まれた言葉で、「神の食べ物」という意味があります。また、学名に「kaki」とあるように、中国や朝鮮半島、日本など東アジアが原産の果物です。柿の名の由来には、実の色(赤き)や実の堅さ(堅き)など諸説ありますが、江戸時代後期の国語辞典「和訓栞」には「柿は實の赤きより名を得たるや、葉もまた紅葉す」と記されています。漢字は、中国名の「柿」がそのまま使われています。

